

「スクールリーダーのためのケースメソッド」の展望と課題

ーワークショップでの体験からー

安喰 勇平 (広島大学大学院・院生)

1. はじめに

本報告は、平成29年2月17日に島根大学で行われた「講演会・ワークショップ『スクールリーダーのためのケースメソッド』」後半のワークショップに関するものである⁽¹⁾。そのワークショップの内容は、前半において徳島文理大学人間生活学部教授・竹内伸一によってパワーポイントで説明されたケースメソッドを、実際に島根大学教職大学院院生らがディスカッションリーダーとして実施し、そのケースメソッド型授業を受講者らが体験する、というものである。そのワークショップは、二つのグループに分かれていた。一つは小学校・特別支援学校グループで、もう一つは中学校グループである。それぞれのグループで別のケースを用いた授業が行われていたが、本報告は、報告者が小学校・特別支援学校グループに属していた経緯から、そのワークショップのみを対象とする。

当講演会・ワークショップのポスターには、「今日、教員研修も児童・生徒の学習と同様、アクティブ・ラーニングで行うことが求められ、スクールリーダーもそうした企画力・運営能力が求められています」と記載されている。この記載から分かるのは、当講演会・ワークショップでは、ケースメソッドがスクールリーダーの用いるツールとして想定されている、ということである。無論、スクールリーダーがケースメソッドを用いることができるようになるためには、彼らがケースメソッドを体験する必要もあるだろうが、あくまで重点は、スクールリーダーの用いるツールとしてのケースメソッドという点に置かれているようである。

当講演会・ワークショップは主として、ケースメソッドとは何か、を受講者に説明し、体験してもらうものであった、と実感された。本報告では、ケースメソッドとは何か、ということについて改めてまとめることはしない。むしろ、ケースメソッドとは何か、という説明を受け、それを体験した人々（筆者も含む）のコメントや感想から「スクールリーダーのためのケースメソッド」の展望と課題を考察するのが本報告の内容である。そこで本報告は以下のように展開する。まず当ワークショップの展開を記し、次にそのワークショップで出された授業者・受講者らのコメントを手がかりに当ワークショップに対する評価をまとめる。そして最後にそれら評価から考えられる「スクールリーダーのためのケースメソッド」の展望及びその課題を論じる。

2. ワークショップの展開

このワークショップのために用意されていた時間は、65分である。内訳は、個人思考・グループ討議に15分～20分、全体討論に35分、受講者からの感想・コメントに10分となっていた。

まず個人思考・グループ討議の段階において、受講者は4グループ（各グループ4人あるいは5人構成）に分かれた。各グループは、4あるいは5つの机を寄せ合った島になるため、教室内に机を寄せ合った島が4つできた。なお各グループには、事前に指名されていた司会がいた。この段階において、受講者らはケース「欠席裁判」⁽²⁾に初めて目を通した。受講者らは、およそ5分程度取られた個人思考の時間に、ケースを読み、その後用意された3つの設問に答えることになる。それから受講者らは、各グループ内で、司会のリードに従いつつ、設問に対する各自の考えを通わせる。

続いて行われる全体討論は、ディスカッションリーダー（以下、DL と表記）によって進められる。なお机は、黒板を中心にした半円状に並び直された。この全体討論において、は、設問 1 から受講者らのコメントが求められ。そして、そのコメントは書記によって黒板に書き写された。コメントが黒板に書き写されるのに加え、そのコメントの内容に応じて、DL によって事前に準備されていたシートが黒板に貼られた（主に、そのケースに登場する人物名や役職などがそのシートには書かれていた）。そのような手順で全体討論は、DL によって展開された。そして全体討論は、当ケースで学ばれる内容に関する DL の総括によって締めくくられた。その後で受講者からの感想・コメントの段階において、受講者らは、主として DL の討論のリードの仕方についての感想とコメントを加えた。その感想とコメントについて次節で考察しよう。

3. 受講者らの感想・コメントから考える

(1) 受講者らの感想・コメントから

当ワークショップには、現職の学校教員や、教員として働いたことのない大学院生、教員として働いたことのある大学院生、大学教員などが受講していた。これら受講者から様々なコメントが出されたが、そのコメントは次の三点に大別されるだろう。第一点は、DL の討論のリードの仕方である。例えば、「このコメントに関連して何かありませんか」と DL が言った後、それ以外のコメントを用意していた受講者はコメントできなくなる、という意見が出された。第二点は、ケースメソッド型授業の理想的な形と比べて物足りなかった、というものである。例えば、受講者同士でのコメントの応答が起きればなお良かった、というコメントが出された。第三点は、自分自身の力量不足を痛感したという受講者の感想である。その感想は「自分は現場を知らないから今回の全体討論についていけなかった」という趣旨のものであった。

まず第一点目のコメントに注目してみると、DL の発言や振る舞いに焦点が当てられていることが分かる。DL の発言や振る舞いが改善されると、ケースメソッドがよりよく展開されることが提案されているのである。また、第二点目のコメントも DL のケースメソッド型授業の巧拙に向けられている。ただ、当ワークショップの性格上、ケースメソッドの理想的な形に近づけるのは困難であった。ここで「理想的な形」として念頭に置いているのは、ケースメソッド受講前の個人予習の時間と、ケースメソッド受講者らの関係性に関する理想的な形である。まず、ケースメソッド授業を受講する際には、本来受講者が事前にケースを読み込んできて、その上で設問に答えておく、という個人予習が前提となっている。しかし、ケースを読むために与えられていた時間は 5 分強だったため、そもそもケースに対する受講者の理解は十分なものとはなっていなかっただろう。加えて、ケースメソッドの学習効果を高める土壌として、学びの共同体が教室内に築かれることが、ケースメソッド型授業では求められる。学びの共同体では、教師対受講者の関係が、受講者の数だけ存在するのではなく、受講者同士が相互に関心を持ち、尊重し合う関係を築いている、とされる。竹内の論じるように、「参加者が相互に関心を持ち、尊重し合う共同体ができあがると、参加者による社会的協働の恩恵が、教室での知的学習活動全体に大きく及ぶようになる」のである [竹内 2010、36]。しかし、当ワークショップでは、名前も所属も分からない受講者らが教室に集まっているため、以上のような学びの共同体を築くのは困難な状況であった。

第三点目のコメントは、発言者が自分自身の力量不足を反省するものであった。この類のコメントでは、ケースを理解するに足るだけの力量が足りていない、と自分自身で感じているのに加え、自分自身と他の受講者との間の力量の違いを感じているように思われる。このような感想を抱くことは、受講者がこれから学び続けるための重要な動機になりうるし、このことはまさにケースメソッドで期待される効果の一つだと言える。竹内は、この効果を自己モデルの更新と表現する [ibid.、123]。そして、ケースメソッドで行われる自己モデルの更新を「解凍・移動・再凍結」という形で形容している。

まず、自分のモデルを変えるためには、自分自身を疑ってかけられるように、凝り固まった頭を柔らかく解きほぐす必要がある、自己モデルの至らなさを自覚し、更新が必要だと自分に言い聞かせなければならない。これが「解凍」である。次に、自己モデルを望ましいものに修正・変更する。これが「移動」であり、最後に新しい自己モデルの定着化を図るのが「再凍結」となる。[ibid.、123-125]

以上の竹内の整理にしたがえば、第三点目のコメントを行った受講者は、まさにケースメソッドを体験する中で「解凍」から「移動」のプロセスを経た、と言えよう。

(2) 筆者の体験から

筆者自身は、ワークショップ後半において「他受講者との関係性が築かれていれば、受講者間での意見交換も生じていたはずで、そうであればよりケースメソッドが機能していたのではないか」という趣旨の発言をした。上記の類型で言えば第二点目に区分される内容である。

しかし筆者は、その場では発言しなかったものの、ケースメソッドを体験した際に行った発言が授業のなかであまり上手く機能していなかったことを気にかけていた。「もっと授業の中で鍵となるような発言ができなかっただろうか」、と。また自分の考えていたことや自分の発言ではカバーできていなかったことを、他の受講者が発言していると、他受講者の考えの柔軟さに驚かされ、自分自身の力量不足を感じていた。例えば「他の受講者の発言の方が、自分の発言や考えよりも問題を深く考えれているな」のように。すなわち、報告者は第三点目に区分される内容を発言こそしていないものの、感覚はしていた、ということになる。ワークショップ内でコメントや感想を述べた他の参加者らも、報告者と同様、語り出してはいないものの、自分自身の力量不足を感じ、「解凍」から「移動」のプロセスを経た者がいたことも予想できよう。

このような点は、ワークショップ後の竹内による講評においても指摘された。竹内は、「ケースメソッドを今後学校での校内研修として用いる場合、研修後に何らかの評価可能な効果が見出される必要がある」という趣旨の指摘を受けた後、「頭の前半分と後ろ半分」という比喩を用いつつ、頭の前半分では討論授業に参加し発言するが、頭の後ろ半分ではその発言を内省する、というコメントを返した。そして、その授業中に自分自身の発言に不十分な点があったことに気づいた時には頭の後ろ側をコツンと叩かれたような感覚に陥り、この感覚に陥入れることが討論授業の恵みだと答えた。この竹内の発言を、スクールリーダーのためのケースメソッドの効果として半ば強引に敷衍すれば、ケースメソッドへの参加を通して受講者は自らの認識や想像の限界を体験することができ、その体験が校内研修・教員研修にとって重要だと言える。自身の既存の認識枠組みを超えて物事を見て判断する能力。これはケースメソッドを通して獲得が期待される能力である。

4. おわりに

「スクールリーダーのためのケースメソッド」というワークショップ参加者のコメントを中心にこれまで考察してきた。ワークショップ内で語られたコメントのみに注目すると、「ケースメソッドを通して成長できた」、「ケースメソッドで学ぶことができた」という内容はあまり見られなかったように思われる。むしろ、ワークショップ内でのケースメソッドの問題点や改善可能性に対するコメントが目立った⁽³⁾。しかし、このことはただちにワークショップ内でケースメソッドがうまく機能しなかったことを意味していないだろう。ケースメソッドの教育効果は、そのようなコメントのみから測定されるものではない。自身の力量不足について語った受講者がいたことを思いかえそう。あえてワークショップ内で語りはしなかったものの、その受講者と同じ様に自身の力量不足を痛感し、自己モデル更新のプロセスへと足を踏み入れていた受講者は他にも存在していたことが予想されるのである。この自己モデル更新のプロセスへと誘うことはケースメソッドのもたらす主たる

教育効果の一つであり、スクールリーダーのためのケースメソッドの展望はこの方向に開けていよう。

とはいえ、ワークショップ内で語られたコメントを軽視することはできない。ケースメソッドを実施した DL へ向けられたコメント及び、ケースメソッドの理想的な形からの乖離を指摘したコメントは共に、ケースメソッドという教授法を実践することのハードルの高さを示唆している。とりわけ単発的な研修としてケースメソッドを行う時には、ケースの個人予習の時間が取れない、または受講者らが学びの共同体として機能しない、というような課題があろう。以上の課題を乗り越えるためには、様々な工夫が考えられよう。例えば、ケースメソッドを用いる授業者のスキルアップや、ケースメソッドを用いる授業者を支えるチーム活動の充実 [竹内 2014、27] がある。

受講者に自己モデルの更新を促すケースメソッドは、現在盛んに叫ばれている、学び続ける教師像と相性が良い。それだけに、それを実施するために高いハードルが残りはするものの、ケースメソッドを用いた教員研修・校内研修が効果的に実践されることの実は大きいだろう。まずはその萌芽が島根大学教職大学院の取り組みにおいて見られるのである。

注

(1) なお前半に行われた講演会については本報告書内にまとめられた相馬 (2017) を、また後半のワークショップに関する観察録は本報告書内にまとめられた岡村 (2017) を参照されたい。相馬と岡村は報告者と共に講演会を聴講した後、一方で相馬は報告者と共にワークショップに参加し、ケースメソッドを体験し、他方で岡村はワークショップにおいて、ケースメソッドを体験するのではなく、観察者として身を置いていた。

(2) 当ケースでは、『小学校における PTA 役員選出をめぐるトラブル』を事例に、学校・PTA の在り方、地域との関係、若手教員・先輩教員の関係/指導、管理職のマネジメント、児童・家庭の変容 etc. を論点にディスカッションがなされた [島根大学教育学部]。

(3) もちろん当ワークショップでのケースメソッドが実際に上手くいっていなかったというわけではなく、目新しい教授法に対する受講者らの戸惑いがまずもってコメントとして目立っていた。

参考引用文献

岡村美由規「島根大学教職大学院主催講演会・ワークショップ『スクールリーダーのためのケースメソッド』の参加報告——研修方法と教材に注目して」『平成 28 年度教職 P 報告書』2017。

島根大学教育学部「(実施報告) スクールリーダーのためのケースメソッドの講演会&ワークショップ」〈http://www.edu.shimane-u.ac.jp/_files/00223089/2_17school.pdf〉(2017/3/27 アクセス)。

相馬宗胤「ケースメソッドを中心に据える教員養成組織 島根大学教職大学院主催講演会・ワークショップ『スクールリーダーのためのケースメソッド』に参加して」『平成 28 年度教職 P 報告書』、2017。

竹内伸一『ケースメソッド教授法入門——理論・技法・演習・ココロ』慶応義塾大学出版会、2010。

——「能動的学修を可能にするケースメソッド教育の実現過程——高等教育における四事例から」『教育学研究ジャーナル』中国四国教育学会編、21-30、2014。